寛永寺出入りの畳屋

※熊井正孝さん

私どもの熊井家は創業二百六十年ということになっていますが、はっきりしたことは分らない。なんでも菩提寺の仏心寺の創建がその辺で、当初からの檀家と聞いております。うちの墓には「谷中中門前八軒町、善光寺連中」と書いてあります。善光寺坂の上で、昔は八軒しか家がなかったらしいですね。

その頃は、今の日医大のテニスコートのところに大きな屋敷を持っていまして、寛永寺一山の畳をすべてやらせて頂くほか、寛永寺へ勤める季節労働者などの身請人にもなっていたんです。

屋号は山田屋松五郎といい、「越後から出てまず山田屋にワラジを脱ぐ」という風にいったもんでございます。その当時の寛永寺といえば将軍様の菩提寺でもあり、お大名が参拝なさる装束替えの塔頭が三十以上、その一つ一つが今の寛永寺くらいの大きさで、今の寛永寺が大体五百畳ございますから五〇〇×三〇として

川端康成さんのうちに住んでいた

も、まあ一万五千畳ほどの仕事をさせていただいていたわけなのです。

だいたい正月に将軍様が先祖の御霊廟に参拝なさるときは、通る廊下という廊下に、毎年、新調の薄べりをひいたといいますから、それだけでも大変です。

それで山田屋もたいそう景気が良かったんですが、ご一新以降、寛永寺はみるみる規模が小さくなり、私どもの家も大変、辛い時期があったそうです。ただ今でも、寛永寺出入りの職方衆の「東叡会」という集まりは入れ替りながら続いております。

現在、寛永寺の畳替えは五年に一度。明治・大正のころは毎年、取り替えておりました。というのは昔は檀家は徳川さんくらいで、法事も年に一、二度ほとんど人が立ち入らない部屋が多い。ところが当時、寛永寺の崖下には汽車が煙を吐いて走っておりまして、その煙が畳の上に黒くつもって畳替えをしてからでないと法要が営めないんです。

ところが戦後、汽車は電車に変り、寛永寺の檀家も一般に開放されて、よく法事に使うんです。みなさん法事には新しい白足袋でいらっしゃる。おのずと畳の雑巾がけをして下さるわけなんです。畳は使った方がずっと長く持ちます。

一方、明治以降、町方では根津の廓がいいお得意だったそうで、明治二十一年、洲崎へ越してからも畳替えにいった。夏の日が昇らないうちに桜木町を出て、テクテク、日本橋から永代橋渡って行ったんでしょうねえ。途中に冷たい水の出る井戸があって、そこで喉をうるおすだけが楽しみだったといいます。

ほかに谷中では酒屋の吉田屋さん、経師の寺内さんがいいお得意で、海軍で「礼なくして整列」というのがありますが、そんなもので毎年、暮れには注文がなくてもやるに決ってますから準備してうかがいました。吉田屋さんの畳ってのは、毎年、表を替えるので、すっかり縁が縫い固ってナカナカ針が通らない。力のいる辛い仕事なんですが、行くと番頭さんがそっと倉庫へ呼んで、升でお酒を飲ませてくれるんで、職人は行きたがりました。

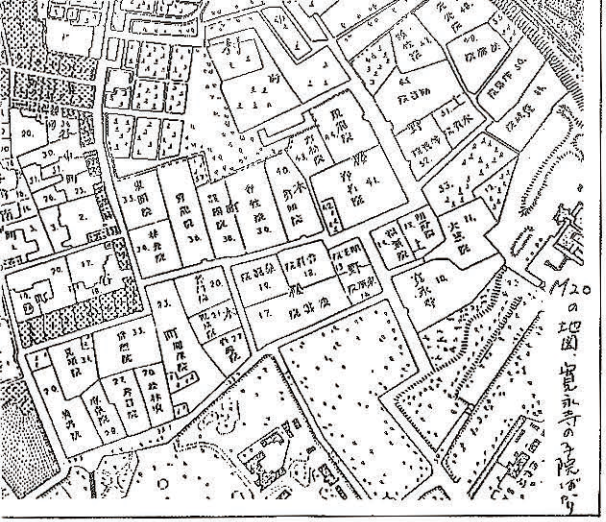
畳の仕事については別の機会にお話するとして、桜木町で思い出すのは、家のすぐ裏が谷中斎場で、ここで震災に乗じて虐殺された大杉栄と伊藤野枝の葬式をやったことです。そのとき谷中の町の人は、主義者の葬式で何か騒動が起るんじゃないかと、みないざというときは逃げる仕度をして、固唾をのんで、怖いものみたさに様子をうかがっておりましたが、まあ実に粛々としたもので、労働歌かなんか歌っただけです。それでもそこらが赤い旗の海となり、谷中署は私服の警官がいっぱいでした。

そういえば谷中斎場の裏が川端康成さんの家で、斎場と便所が向きあっているのですね。川端さんの掌編に斎場をテーマにしたのがありますよ。(「化粧」短編全集にも収録)。うら若い婦人がトイレに駆け込んで、葬式の間こらえていたのが堰を切ったように泣く。しかしひとしきり泣くと、コンパクトを出して顔を直し、鏡に向ってニコっとして出てゆく、というような筋でした。

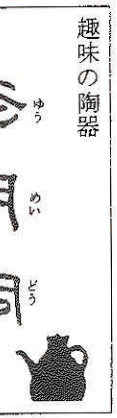
なんでこんなことを覚えているかというと、その生原稿が、実はうちにあった。私の友達で日暮里で紙屑問屋をやっていた宮内という人がくれたんです。彼は「文芸春秋」の返品の解体屋さんで、ご婦人のパートでしょうな、何人か連れて本社へ出かけ、表紙とグラビアと本文に分けて、富士の再生紙工場に送る仕事をしていた。そのとき紙屑の中に作家の自筆原稿も混じっているらしくずいぶん持ってました。木村荘八、河野通勢、小村雪岱なんかの挿絵もあったようです。「これはお宅の裏の話だから」と貰ったのに戦争で焼いてしまいました。

その川端さんのお宅へも畳替えにいきましたが、あそこはつらい。狭い平家のうちにポケットテリアのワン公が五、六匹もいて、畳がおしっこだらけなんです。川端さんは例のギョロリとした目で、ほお骨高く髪長く、絣の着物かなんか着て、ヘコ帯をうしろでむすんで、仕事をじっと見てはいますが、口は一切ききません。奥さんの方がずっと背が高く、体格もよく、珍しい断髪。あの当時、丸髷に結ってない奥さんが犬を連れて歩くんですから、そりゃ大層、目立ったものです。

※熊井さんはいつもお世話になっているアートフォーラム谷中の大旦那さんです。畳の話は次号で。



趣味の陶器



陶明洞

(言問通り、寛永寺橋近く)

上野桜木一―一三 ☎八二一―六五一〇

京都府 白雲洞

掛軸・屏風・襖 制作

団子坂上鶴外図書館前入ル ☎821―2785